
小異国恋歌～龍神の華～

霜月璃音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小異国恋歌〜龍神の華〜

【Nコード】

N6027K

【作者名】

霜月璃音

【あらすじ】

異国恋歌〜龍神の華〜のおまけ的番外編です。柳鏡の子育て奮闘記となっています。よろしければどうぞ。

ホギヤー！

渡り廊下にまで聞こえてくる、元気な声。それはもちろん、居ても立ってもいらなくてその部屋の前をずつと行ったり来たりしていた、彼の耳にも届いた。女官が呼びに来てくれるまで待とうとも思っただが、我慢しきれなくなつて、その部屋の戸を勢いよく押し開ける……。

「生まれたのかっ？」

女官の一人が、彼に非難めいた視線を向けた。

「お静かに。はい、たった今……。王子様のご誕生です。おめでとうございます。」

「王子……。」

つまり、彼の息子だ。そのまま、寝台の上に疲れ切つて横になつてゐる母親、彼の妻と、その横に寝かされている赤ん坊に視線を当てる。彼の足が、ゆるりと動いた。緊張でどこなくおぼつかない足取りで、そちらに歩く……。

「あ、柳鏡……。」
リュウキョウ

彼女が、弱々しく微笑んだ。その隣で、たった今この世に送り出されたばかりの赤ん坊が、スヤスヤと寝息を立てている……。

「男の子……だつて……。」

「ああ、聞いた……。」

息子に向けられるその目からは、緊張の色が窺える。

「ほら、お父様でしょ？抱いてあげて……。一番、譲つてあげるから……。」

恐る恐る、手を伸ばす……。そして、その指が柔らかいものに触れた。彼の動きは、限りなくごちない……。

「もっ、忘れちゃった？教えてあげたじゃない……。足の間から手を入れて、その手で赤ちゃんの頭を支えるの。それを反対の腕に載

せて安定させて、そっちの腕を外側に持つていつて、自分の体とその腕で赤ちゃんを支えるの……。」

「あ、ああ……。」

自分の腕で触れたら、壊れてしまいそうだ。それでも彼女に言われた通りにそつと抱き上げる……。

「こうか……?」

「うん、上手……。柳鏡も、立派なお父様だね……。」

彼の心にその時あったのは、不思議な感動……。柔らかくて、小さくて。それでも、自分と同じような形をしている、自分の子……。彼女が横になつてゐる寝台に、自分も腰掛ける。彼女が、柔らかく微笑んだ。

「あんた、具合は……?」

「ちよつと疲れちゃったけど、大丈夫だよ……。男の子なら天連テンレンつて、柳鏡、言つてたよね……?」

「ああ……。」

「お父様に素敵な名前をつけてもらえて良かったね、天連……。」
二人で、小さなその顔を見つめる。その面差しは、父親そっくりだ……。

「柳鏡そつくりだね……。」

「ああ、そうだな……。」

「私から生まれたのに……。」

母親が、そう不満気に口を尖らせた。そんな彼女に、笑いかける。

「なんだよ、焼き餅か……?」

「別に……。」

あきらかに見え見えの嘘をつく。出産を手伝った女官や産婆は、静かに部屋を後にした。室内には、三人だけが残された。

「あんた、少し休めよ。ついてるから……。」

「本当は、出産にもついていてくれるって言つてたじゃない……。」「再び、彼女が不満気な顔をする。彼が、苦笑してそれに答えた。

「邪魔だから出て行けつて、追い出されたんだよ。今度こそ、つい

てるから……。」

彼女は幸せそうにニコリと微笑むと、そのままスウィットと眠りの世界に引き込まれていった。

二十一歳、六月十八日。今日から日記をつけてみることにした。……いや、日記じゃねえな。毎日とか面倒くせえし。気が向いた時だけつける。お、我ながら良い案だな。それなら面倒でもねえし。今日、子供が生まれた。俺の、息子。正直言うまで、抱いて見るまで自分が親になったっていう実感がなかった。景華キョウカの方は動いた、とか楽しそうに言ってたから、そうでもないだろうけど……。でも、あの瞬間に実感した。あの感動は、多分一生忘れらんねえ……。赤ん坊は、怖かった。小さくてふにゃふにゃで、抱き上げる時に壊れるかと思った。そのくせちゃんと人間の形してるんだから、すげえよな。景華から生まれたっていうのが、真面目に信じらんねえ。いくら赤ん坊が小さくたって、あの小さな体から生まれて来たっていうのが嘘みてえだ。……相当きつかったと思う……。どっちも。

彼がそう記した文字は、やはり読めない程汚い……。それでも、あの瞬間の感動を何かに形として残しておきたい……。そう考えた彼が思いついた手段が、景華が毎日つけているという日記帳だった。彼女の新しい日記帳は、彼は未だに見つけられていない……。字の練習にもなるというから、ちょうどいいかもしれない……。そうも思った彼は、たまに日記をつけてみることに決めた。

それから、五か月が経過した。彼女はすっかり回復し、かなり前から公務に戻っていた。その細い腕に、子供を抱きながら……。

「陛下、やはり乳母を探された方が……。お疲れではありませんか？」

そう景華に訊ねたのは、天連の祖父にあたる龍連瑛ロンレンエイ、柳鏡の父親だった。彼も孫は非常にかわいいのだが、やはりその母親が一国の女

王ならば、乳母に育てられても仕方ないと思っていた。

「私もそれは考えましたが、自分の子ですから、自分で育てたいんです。公務に支障が出ないようにしますから……。」

連瑛の不安気な瞳が、親子の姿に向けられる。彼女に公務に支障をきたさないようにという意味はあっても、やはり休んでもらわなければ困る。

「それに、一日交替で柳鏡が面倒を見てくれるんです。信じられますか？彼、この子をおんぶしながら近衛隊の仕事である城内の見回りをしてくれているんですよ。」

連瑛も、それには驚いた。まさか、自分の息子がそんなことをしているとは……。

「それに……。」

彼女の言葉が続くようなので、連瑛はまた話を聞く姿勢を整えた。

「それに天連が夜泣きしたら、柳鏡があやしてくれるんです。私には寝てろ、って言うて。本当ですよ？昨日も……。」

ギャーッ！オギャーッ！

夜中、赤ん坊は急に火がついたように泣き出した。公務で疲れてはいるが自分の子を放っておく訳にもいかず、重い頭で起き上がろうとしたその時だった。

「いい、あんたは寝てろ。」

隣にいた彼がそう言うて起き上がり、そつとその息子を抱き上げた。その様子から、子供には大分なれたようだ。そのまま自分の羽織でくるんでやって、渡り廊下に出て行く……。外は寒いが快晴で、雲一つない。戸が閉められたが、まだその泣き声は聞こえていた。そして、あの彼が信じられない程優しく息子に語りかけている声も……。

「ほら天連、月だぞ……。あまり泣いたら、お母様が困るから……。」

その言葉に、苦笑が漏れる。赤ん坊は泣くのが仕事なのだから、そ

れはどうしようもないことなのだ。それなのにそんなことを言っている彼が、なんともおかしい……。やがてどの位経ったのだろうか、天連が再び寝付いたらしく、彼が戻って来た。息子をそつと彼用の寝台に戻してから、彼女の隣に戻って来る。

「天連、寝たの……？」

半分寝かかっていた彼女は、辛うじて彼にそう訊ねた。

「ああ、さつきな……。」

「柳鏡も、すっかりお父様だね。私より天連をあやすの、上手かも……。」

寝台の隣に入ってから、彼の腕が上掛けの布団を掛け直してくれたのがわかった。

「アホなことばかり言っていないで寝ろ。あんた、明日閣議だろ？」

「うん、おやすみ……。」

最後に彼女に残ったのは、大きな手がその頭を撫でてくれた感覚だった。

二十一歳、十一月二十日。今日は、父上に褒められた。なんでも、真面目に天連の世話をしているのが偉い、とか……。自分の子だから当たり前じゃねえのかと思ったけど、言わなかった。父上は、母さんに任せつきりだったらしい……。仕方ないよな、俺と母さんの他に、父上には家庭があっただから……。まあ、褒められたんだから悪いことはしてねえだろ。……天連の世話は、正直言っただけいい。かわいいしな。なんでも、父上は俺に子供が育てられるのか不安で仕方なかったらしい。それで、景華に乳母を探すように言おうかとも思っていたらしかった。自分の子供信用しろよな。まあ、いいか。また何かあったら書くことにするか。おしまい。

相変わらずの、汚い、一生懸命な文字……。彼の気ままな日記帳は、今度はいつつけられるのだろうか……。

（後書き）

こんにちは、霜月璃音です。只今連載中の異国恋歌〜風空の姫〜の後書きに書かせていただきましたが、これは異国恋歌〜龍神の華〜のおまけです。

このお話を書いた理由は一つ、あの柳鏡に子育てなんてできるのだろうか、と私が不安になってしまったためです。きちんと頑張ってくれているようなので、良かったです。読者の皆様、お気に召したでしょうか？

またまた最後になってしまいました。ここまでお読み下さった皆様、本当にどうもありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6027k/>

小異国恋歌～龍神の華～

2010年10月10日06時44分発行